



貴女の闇は暗い
のでしょうか。私は目を
閉じると明るくって眩しい

右端に白いドアが浮いてきて、色を変え
続け、きらめき、

あそこは
私の出口

エッセイ集 吊鐘

ぱたりと
ドアは

閉まっ
てう
まの
です



あそこは
私の入口

島さち子

エッセイ集

弔
鐘

島さち子

装画

島さち子

弔鐘

島 さち子

一日が二十年もの長さ、一年が一時間もないような、自分できめた時の刻みで生活したい。それにもかかわらず、わたしの全身はリズムをうち、どこかの時をつける鐘に支配され逃れようもない。クリスマスがきて、一年の終わり、除夜の鐘が鳴ってしまい、昔と変わらない暦がめぐられる。鐘の音を聴くと、心臓の鼓動が鐘の振動と共鳴をおこしているのがわかる。

一生に一度しか聴けない音を、是非あなたのお耳に入れたい、というAからの電話で、その夜、わたしは友達二人をさそって出かけた。

通された部屋は天井の高い広間で、部屋一杯に白い陶の円形の敷物が敷かれており、ところどころ

に香りのする葉っぱが、無造作に投げ出されているだけで、椅子一つない。

わたしたちは部屋の真ん中に、芝生の上みたいに足を投げ出し、その「音」とは何だろうと話し合い、Aを待つのに退屈し、この家の人は失礼すぎると憤慨し、寝そべって話し、ついうとうとと居眠りをしてしまう。

何時までたってもAは現れない。

目をこすっていると、どこかでカチンという金属のすれあう、硬質な音。びっくりして見上げると、天井の二つの隅から突き出された大ナイフと大フォークがぶつかり合って、さっと下に降りてくる。

わたしは悲鳴をあげ、身をかわしたが、友達二人は眠りこけていて身動きもしない。

ナイフとフォークはブツンと鈍い音一つで二人を刺して持ち上げ、大口を開けている天井の照明の穴に放り込んでしまう。

ナイフとフォークはまた下降し、わたしを狙ってくる、刺そうとする。わたしは体の数倍もあるナイフとフォークの攻撃から逃げ回り、身を伏せると見せて、すっと横に飛ぶ。ドッジボールで、運動神経もないのに、最後まで生き残る何時ものやりかたで、わたしは身をかわしつつづける。

勢いあまったナイフとフォークが床に激突し、床の円形の敷物が真二つに割れ、わたしは割れ目に

堕ち込んでしまう。

体を小さくして割れ目に隠れているうち、ナイフもフォークも皿の上に無造作に投げ出される。

そっと両側の半円になった敷物を見回すと、わたしのつけていたパールのネックレスがぱらぱらに飛散し、上から友達の服の付着した肉片が、ぽたりと落ちてくる。フォークには、友達の根こそぎになった髪がリボンを結んだままからみついている。

そのときだ。上から、ごうーん、ごうーんという鐘の音！ 割れた皿に音がぶつかって同じ振動で震え上がり、鐘の音は何重にもこだまして、とめどない響きを轟かせる。

わたしはそれを、友達の弔鐘として聴いた。

それともわたしのための弔鐘だったのだろうか？ これを聴いたわたしの心臓のふるえは、共鳴現象というよりも、打ち砕かれたというほうがふさわしい。

あそこをどうやって脱出できたのか？ 全く覚えていない。

ともすると、わたしは生まれ変わり、別の生を生きているのかもしれない。

いま、あらゆる音が窒息し、わたしは自分のための弔いの鐘をもう一度聞きたくなっている。

少女は消えた

島 さち子

「これは、あなたのお母様の女学生時代の写真です。僕の手元に置いて、近いうちに何処の誰のものかわからなくなるでしょう。僕にとってそうであったように、貴女たちにとっても貴重なものと思われますので、当方生あるうちにお送りすることと致しました」

短い言葉を添えて、送られて来たのは、亡くなった母の古い写真の束で、送り主は親戚の老人だった。

……何処の誰のものか分からなくなる……ごく自然な話なのだが、ずばり言われて、どきっとし、この世のあわれが身にしてみた気がした。

着物に袴の女学生時代の写真には初めて見るものも何枚かあって、台紙裏、詠嘆調の美文に、吹き出したり、別人じゃないかと疑ったりして、飽きもせずに見つめつづけた。

それから十年、わたしは写真を撮ることも撮られることもしなくなっていた。人も風景も、その時々、目に映ったものだけでいい。目を閉じて浮かぶ映像だけでいいと悟ったらしい。

ところがこの間、ある人に一枚の写真を手渡された。隅に立っている人物が、最近のわたしなのだという。こんな、雑巾を絞ったような姿は、絶対に私ではない。全く知らない人です……。私は強く否定した。

そんなわたしを、その人は不思議なものを見るように、目を瞞ってみつめていた。

お気に入りの写真だけ残して、記憶を美化したいと願っていた友人が、火事ですべてを焼失した。そこでアルバムの再生をめざして、幼児時代や、少女時代の自分を探して街を彷徨い、カメラのシャッターを切り続けた。

或る日、思い描く少女の自分がお誂えのチーズ笑いを浮かべているのに出会った。カメラにぐんぐ

ん近づいてくる……。

「あたしを撮って、どうしようってわけえ？」

その子のふてた声。

「とても可愛いから……」

彼女が言い終わらないうちに、フィルムを引き抜かれていた。

撮りためていた過去の少女たちの愛らしい写真の全部が、この時一瞬にして、何処かの誰かの写真に早や変わりしてしまったという。

しかも臉の裏に浮かぶはずの原風景まですっかり消し去られ、この世の始まりか終わりが分からない、霽しか見えなくなったと彼女は嘆いている。

女性の生き方と、仕事

島 さち子

1 働く女性が、エコノミックアニマルになってはいけない。

人の心の相当部分は、何かの暗示を受けている。「おまえは女、かよわい、男よりバカ、かわいい女は愛される、結婚がすべて、仕事は二の次、結婚まで。女は職場の花であれ！ 対等な仕事で男と競うことはない、今の社会にあっても、なお、家庭を守るのが、女の使命、女の幸福……」

こんな囁きを何万回も聞かされてきた。過去だけでなく現在もなお囁き続けられている。

人間として自分の持っている能力が一生引き出せないのではないか？との思いでいるのは落ち着きのない満たされないものだ。

それに反してこの暗示を信念にかえていけば迷いが無い。

「男はファイトだ！ 根性だ！ 一度決めた以上は実行する！ 男は何でも出来る！ 女のように愚痴はいわない！ 女房を働かせないのが男の甲斐性！ 仕事！ 仕事！ 仕事！ 仕事こそ男の本分！」

男性はこんな暗示を信念にかえる。それがよぎなく選んだ仕事であっても、いったん選んでしまうと、生涯の仕事と信じ、その仕事の鑄型に入るように能力を彫り落し三角を四角に変えるような無理を平気でするのだ。

暗示の掛かり方には個人差もあるが、この種の暗示にあなたも、わたしもまだ掛かっているのではない。個人としては暗示からさめていても、さめない人々も集まって社会をつくっているのだから、これこそ自分の仕事だと思っても、社会がブレーキをかけて進めなくしたりブレーキをきかなくして、無暴な方向に突進させたりする。さめた目でみれば男と女の違いは妊娠出産を除外すれば、仕事に対する能力は同等、あるいは性差というより個人差なのだ。腕力は機械力の社会では昔ほどの効用がない。

「男並みの仕事がいい」という声があがる。この男なみが、エコノミックアニマル的な猛烈社員たるべくかけられた暗示にかかって、自分を見失っている男なみということだとしたら問題である。公害をおこし、買占めに加担する男性の愚をこの目で見てきたのだ。

女性がかかっていた暗示からさめ、そのかわりに男性と同じ暗示にかかろうというのでは、人間としてなんの進歩もない。

2. 創意のない仕事は、人間の仕事ではない。

水の中で暮らしていたオタマジャクシがカエルになって水から抜け出し、空気のなかで新しいやりかたで呼吸をしようとするように、人間としての仕事に対する考え方の転換期がきている。仕事と女性の生き方が問題になるのと同様、仕事と男性の生き方も考え直さなければならぬところにきている。今までの男性がこれからの女性の手本になるはずがない。

ザミヤーチンの「われら」という小説の世界では独裁者と構成員の「われら」しか存在せず「私」はいない。魂を持っていることが病氣であり、脳手術がされる。

仕事は生活の資金を得る手段であり、職場の側からの一方的要求にこたえることだと割り切るのでは、脳手術もしないのに魂がないことになってしまう。どんな単純な仕事でも、どんなに高度の仕事でも、仕事は職場に属するものではなく、私自身に属するものであり、私の意見や創意と結びつかない仕事は、人

間のする仕事ではないと考えるのが本当である。私に属す仕事と、職場の利益からする要求と、どの程度の妥協ができるか考えてみなければならぬ。

生まれたときもひとり、死ぬときもひとりだ。自分自身の尺度で価値判断をしていく以外にないのである。

3 働く女性は妊娠して、うろたえるけれど

性からの解放があり、性を楽しむ自由があり、産まない自由もある。仕事を持つのも自由、もたないのも自由、どちらが良く、どちらが劣っているとはいえない。それは自分自身の生かし方にかかっているのだ。

女性の人生も、結婚中心の人生から、人間としての自己を大切にする人生に変わってきている。男性が人間であることを代表する立場にあり、女性は人間であるという前に女であるとされ、それを当然と受け入れ、甘えてもいた。若い可能性いっぱい青春を結婚相手を見つけることだけに熱中し、子供の成長とともに、ものみごとに脱け殻になった。

「おかしくても何でも、子供が出来るなんて考えてもみなかつたんです。結婚は確かにしましたけど、夢にも考えてはいなかったんです。いま辞典を作る仕事をしていて、もう少しで完成です。子供なんて生んではいけない、とてもそんなことをしていられないんです。お仕事ができなくなったり、一生わたしの仕事が出来なくなったり、一生わたしのした仕事がなくなりますもの。わたしが生まれてきたことに、生きたことに、なりませんもの。とても子供を生んでくすぐずなんてしていられない……。結婚すれば子供が出来る、そんなこと誰だつてわかることなのに、妊娠らしいと思ったとき、はじめてきがついて、ええ、驚愕でしたわ。今になってうるたえても仕方ないにしても、生まれてから手にかけるよりは……。今の方が……。二カ月でもう形が揃っているなんて、そんなこと、たまらないわ。女の構造って恐ろしいものですね。子孫繁栄なんてものと全然異なった立場で結婚したのに……」

彼女はうるたえ、途方にくれているのだ。わたしはそのことの切実さにうたれてしまう。

現実の問題として、妊娠、出産は仕事を一時的に休止しなければならなくする。そのことがアキレス腱になって、今まで女の仕事は責任感において、効率において、男と平等ではないと判断される根拠にあげられ、仕事を続ける上で女性が圧迫を受け、何重もの無理をすることになった。

流れ作業的能率主義に毒された社会から考えれば、仕事の針は、時計の針と一緒に進むもので、休職は仕事を仕事として成立たせない、破壊行為ということになる。しかし、ちょっと冷静になって考えてみよう。

4 育児休暇は女性を進歩させる。

週休二日がそうであるように、一年や二年、仕事を休むことが、優れた仕事をするために、そんなに大変なマイナスなのかどうか、むしろプラスになりはしないか、問い直してみたらいい。

男性であっても、独身女性であっても、産まない既婚女性であっても、それくらいの休暇は欲しいのだ。生きるために必要な、深々とした深呼吸、仕事を離れて仕事を見つめ直す……。

長い休暇をとって、あるひとは世界中をみてあるき、あるひとは全く何もしないで思索する。ある人は趣味に没頭し、ある人は学校で勉強する、彼女は子供を生む。

子供を生むことは特別価値のあることであって、子供を産まない人の同列におくなんて、とんでもない。母子福祉政策の面から保護されるべきものだと思える人がいるかもしれない、勿論保護すべき政策は、密でなければならぬ。しかし、仕事の空白は空白である。

仕事に対するとき母親であることは何の意味も持たない。人間が仕事に対してしているのだ。甘えで心を貧しくすることはない。みんなが長い休暇をとれるなら気兼ねの必要もなくなってしまう。

現段階において、出産は女性が受け持たざるをえないとして、保育所の完備が必須条件ではあるが、完備していないなら、男性が出産した女性の後を引き継いで、育児休暇をとって育てることができたらどう。それが普通の世界が、近くやってくる。メスの産んだ卵をじっと温めているオスペンギンの優しさがあればいい。男性の心の中には女性になりかわって、育児を夢見ている部分もある。

先日の新聞によると英国では妻が妊娠すると、お腹の膨れる男が非常に殖えているという。マイホーム型男性も、仕事型の女性も多くなり、今までのらしさの枠は取り除かれたつがある。

男性が赤ん坊を背負って子守り歌をうたいながら旅を楽しんでいる、のんびりした光景も夢ではない。男性にとっても立場を大きく変えてみれば思わぬ発見もあるだろう。育児に直接タッチできる充実感。育まれる親子の愛情。これは男性が家庭で何となく味わっている疎外感を埋めるだろう。

自由に心を解き放つことだ、週休の増加や長い休みを、生のゆとりとして吸収できる社会がくる。それを常識に変えていく努力こそが必要なのだ。

育児休暇をとる場合、男も、女も、自分が他より少し先を歩いているのだと思うことだ！！

5 人間としてやりたいことをやるしかない

生命が躍動しているのに、好奇心でいっぱいなのに、目移りし、足がすぐわれるほどに仕事の種類があるのに、将来を選択しなければならぬ、せっぱつまった頃になっても、自分の潜在能力が見つけれない若い女性が多い。幾つかの進路のなかから一つを選ぶために、その場しのぎの価値判断をよぎなくされる。そして、一度選んだ職場や仕事から二度と離れることが出来ないというように、楽しさも充実感もなく、人生の大部分を過ごしてしまう結果になったりする。

試行錯誤は何回でも何歳になっても許されるのだ。新しい価値判断が自分のなかに生まれてきても不思議はない。必要なのは潜在能力を探そうとする真剣さだ、やりたいことがあり、それをやりつつつけていくのは、どんなに苦しくとも喜びになる。

しかし、まだまだ女性を圧迫し、労働者に厳しい社会だ。妊娠出産という現実にとつと、女であることの不自由さが、身にしみるだろう。

自分で自由にコントロールできる仕事でなければつづけにくくなる。

つづけても職業と家事と育児の二三人前の労働を引き受けてしまう。

女性にとって仕事をもつことが果たして本当に幸福なのかどうか、いまだに問うひとは多い。しかし、それは、男性にとつてもいえることだ。

それでは、家事には人間の一生をかけるだけの価値があるのか、またそこに戻ってしまう。

余暇開発センターの展望によると、七年後に週休二日が定着し、一年の休日は百六十一日になるという。

次第に問題は解決されていく。

多様な生き方がある、女性にとつても、男性にとつても悔いのない生き方など、ないのかもしれない。

風が吹いている、緑がある、ぼんやりそれを見ている。時にはそんなことが生きる理由を積極的に説明してくれたりもするのだ。

人体について

島 さち子

三つの穴のあいたビケット

——あなたの体はどんな形をしているのですか？

——頭があつて、のどがあつて、のどから手と足の四本がタコみたいにぶらぶらさがっている。

——今までこんなこと気づかなかつたけど……、体はどろりと解けた黒いもの、ゆがんだ隙間があつて、赤血球がころんころんと、ころがり出ている。

——千本の手が朝日の光芒みたいに体から出ているの、どの手も誰かに握られ引つ張つていかれそう。

――あばら骨の籠のなかでみみずを飼っているかたち。

――灰色の一枚の紙切れだ、寝息に翻って、いびきをたてている。

――左右の手と手の間、右手と右足の間、左右の足と足のあいだ、大きな水かきがあつて、わたしは風呂敷みたいに広がって浮いているのよ。

――象アザラシのような肉の塊だ、でも途方もなく長く伸びる触手を隠していて、ときどき稲妻のようにさつと動く。

なかには仏像のように、千本もの手があるという崇高なものもあるが、概してみんなグロテスクだ。聞くに耐えない、というと、みんな慌てて、これでも十人並だと言ひ張つてゆずらない。一人並とも、十人並、万人並とも言えるだろう。人間にはきまつた形はない。

生まれつき盲目だった人が、いま開眼手術で視力を取戻したとする。三角も四角も円も、一度も見たことがないのだから、区別することが出来ず、みんな同じに見えてしまうというところで、数年はうまくいかないらしい。

感覚は体験や環境を通して、ひとりひとりによつてつくられているものだから、身体というものが、どののひとにも同じ感じで捉えられていることは、あり得ない。

現実そのままではありえず、抽象したものが感覚なのだ。あるものをあるがままに捉えると言っても、わたしたちは感覚を通してしかとらえられないのだから、結局抽象になってしまふ。

わたしの身体がどんなであるか、身長、体重、胸囲、足の形、指紋、ホクロまで注意深く捉えてみたところで、日頃のわたしの身体に対する感覚とはおよそ異なつた何かであり、その方が正しいとは絶対にいえない。

人体は不定形だ。眠れば灰色の紙切れになり、目覚めはとろんとしたアブクがポコポコのぼる。立てば千本の手が光芒のように広がり、どれも一人の身体でありうる。

トポロジーという数学では、三角も四角も円も同じ点の集まり、球も円錐も立方体も、一本の木のよう枝分かれした立体も同じものとみる。どんなものもゴムみたいに、裂けたり、くっついたりしない理想的に伸び縮みをし、変形できる物質で出来ていると考える。

人間の身体をみる。変形できる物質とみるのだから、表面を一寸丸め球面にしてしまうことは簡単だ。その球面には、突き抜けて外とつながる管がある。口から、のど、胃、腸、肛門とつづく一本。また鼻の穴が二つあって肺につづき、行き止まりだが咽からの管とつながっている。一つの穴の部分を外へ外へと引き出すように引っ張っていくと、一つの穴が分かれる。まだ接合している管の一つの

穴を外へ外へと引き出すと、二つの穴にわかれ、全部で三つの穴があく。つまり、人間は三つの穴の開いたビスケット型ということになるらしい。

とにかく人間の身体などというものは、三つの穴の開いたビスケット曲面ととらえるのも自由なら、或る人の感覚のなかで、完全に透明なまま生まれてきて、完全に透明のまま死んでしまうことだってあり得るのかも知れないのだ。

構造、心は何処にいるのだ？

やはり人間は二本の足で立っている。頭は重いし、重心は高いし、支持面である足の裏は小さいし、よく見れば実に不安定だ。

ネコを首のあたりでつまみあげてぶら下げると、曲げるのになれた足を下のほうに伸ばし、毛並みの衝突している腹部をあらわにするのが、とてもあわれで、最高の動物虐待ではないかという気がして、素早く目をそむけてしまう。人間も動物なのに好んで、ネコにおけるあのみじめな形、両足を腰の部分で百八十度にし、おかしなことに本来地面に向けて、他人に見られてはならない部分であるべき弱々しい体の下面を、相対する人の方にわざわざ向けているのだから理解に苦しむのだ。それだけ

ら人間は衣服を着けなければならなくなったのかもしれない。動物愛護者なら、人が衣服をつけているからといって、胸や腹の部分に目をあてることには臆病なのではないだろうか。

人間の祖先が樹上生活をして、両手で枝につかまりぶら下がったり、枝から枝へ飛び移っているうちに、足の付け根が変形して、その姿勢になったものらしい。

背骨は何百もの筋によってヨットの帆のように支えられているというものの、いつギシツギシツと音をたてて骨が半分減り、背が縮まないと限らない危うさがある。

頭の重み、そのなかには脳の重みがある。心は脳の中に住んでいるという人が多いそうだが……。

——あなたの心は、一体身体のどこにあるのですか？

——のどのあたりに、いつもつかえていて、不機嫌でどうしようもない、もつと奥に引っ込んでいたらどうなのって言うのに、これ以上奥はないと言うのよ。

——いま散歩にいらっているみたい。だから言うけど、小指の先あたりに住んでいるようなの、時々右から左の小指へ飛び移ったりするわ。この身体に対して心って実に小さいものなのね。

——心は後頭部の出っ張ったあたりの内側。角をいっばいもつた星みたい。角の先は鋭敏で、何かに触れたり、考えたりすると、みんな縮んで丸い穴を開けて隠れてしまうの。

——耳の障子の向こう、その底のあったかい部分にひそんでいるような、時々障子を、開けて出て入り入ったりする音が、カサコソとするのよ。

——あばら骨の中央部、しーんとした、奥深く、震え続けているところがある。それが、心らしいの！

——でも、心って、本当は身体の外にあるのね。見えないけれども、わたしは時々見つけては、飲み込むのよ。飲み込むと心臓の片隅にしばらくいるけど、いつか消えてしまっている。ふだん、心はそこから、わたしをみているのよ。何時でも！ その位置が一番気に入っているのが、わたしには、わかるのよ。

——額の中央、八の字のよるあたりに、何時もじっとしている心がある。

感覚で捉える一人一人の心は身体のみまった場所を占めているものでもないらしい。

科学的にいつても、心が脳に潜んでいると言い切れるものでもないらしい。

頭蓋骨のなかの大部分をしめている脳を抜き取ってしまったって、それ以外を残した犬やネコが普通百日、なかには一年も生きるのがあるということである。寝ているわけではなく、歩き、食べ、眠り、注射をすれば哀しそうな声をだすそうさ。無条件反射という、生まれつきの本性は、動物や人間の生

きていくために必要な機能であるが、意外に多様で、生きている最低限のものは揃っているという。

犬やネコが大脳なしで生きるように、人間にもそれが可能だとしたら……。

大脳はもう少し、住み心地のよい身体を求めて、服を選ぶように身体をさがすかもしれない。気に入ったものが見つかって、その身体に大脳は移り住む。快い、新しい生活をはじめよう。ところが一方、大脳のなくなった昔のボロの身体が死を待って、研究材料の犬小屋の隣り、灰色の部屋で暮らしているのだ。歩いたり、食べたり、飲んだり、痛ければ哀しそうな声もだしている。

家族や知人は、どちらをわたしだと思ってくれるのだろう。多分ふさわしくない身体のなかにもぐりこんでしまった大脳など目にもくれず、灰色の部屋の気の抜けた？ わたしを、わたしだと思ってくれしんでくれるだろう。

しかし移植された大脳は、その新しい肉体の影響を受けて、次第にももの考え方などに変化が起これるに違いない。肝臓の悪い人は脳が二次生に変化していき、ついには昏睡状態になって死ぬ。肝臓だけが脳に影響を与えるというのではなく、色んな臓器、血液、ホルモン、どれもが、何らかの形で変化を与え、大脳も以前の身体のわたしとは違ったものになってしまいうに違いない。

結局、わたしは本当に生きているのか死んでいるのか解らなくなる。

死ぬと言うことが何で、生きていくことが何であるのか、判定はむつかしい。細胞が全部死んでしまわなければ死でないと言うならば、子供は父親の精細胞が母親の卵細胞に入って、それが増殖したものだから、子供さえいるならば死はないことになってしまいうだろう。

大脳の数百億の神経線維を植えられる側のそれにぴったりつなぐことは出来ないから、現段階では脳移植は出来ないといわれている。しかし、心というものが身体の何処にあるか、わからないのであれば、どんな内臓の移植も根本において同じ心配につながっているのだ。

アメリカで二十歳の若い婦人が前夜夫婦喧嘩のすえ、自殺した。夫はその遺体を分解して、他の人に提供することを承託し、一度に四つの臓器、腎臓、心臓、肺臓、肝臓が移植され、アイバンクに角膜が収められ、その後の移植に備えている。と報道された。

死ぬとき一度に身体中全部で死にたいなら、夫を疑い、親を疑い、兄弟を疑い、子を疑い、わたしの細胞の五百兆何個の、ただの一個も……その細胞のなかの染色体の四十何本のヒモのうちの半本も、絶対に、誰にも渡さない旨、きちんとした遺書を公証人につくってもらわなければならないことになる。

行動、大部分はわたしのしらぬこと！

身体表情や動作は、怒っているときも、喜んでいるときも、わざとそう見せないことができる。けれども内臓の働きは、思うように調節することはできないから、本当の感情の動きがすぐにばれてしまう。内臓が怒っているときは、筋肉へ血液を送るために、皮膚の血管は収縮してしまうから、真っ青の顔になってしまう。どんなに愉快そうな顔をしたところで、怒っているのは顔色を見ればわかってしまう。嘘をつくときも、どんなそしらぬ顔をしてみたくところで、掌の汗でわかる。嘘発見器はそれを利用したものだろう。

わたしたちの知らないうちに、わたしたちの身体は行動している。自分で命令を出して、自分の身体が動いているとは限らない。殆どのは、わたしたちの意識と関係のない反射としての指令が脳から出ているためであって、わたしたちに責任をとれと言われても、とても責任などとれる行動ではないのだ。随意運動と言われるものであっても、意識的に行われる部分は、ほんのきっかけにすぎないらしい。

けんかをする。まずその人を見て、怒り、それからけんかをすると言うのが筋が通るけれども、いつのまにかけんかを始め、それから本当に怒りだし、相手が誰であるか見る、などということも多い。

歩く。歩こうと思つて歩く場合もあるけれども、実際は意識的でない場合も多い。何歩歩け、何センチの歩幅で、どのくらいの足音で、内股で、そと股で、つま先から先に、かかとから先に、膝は……、背筋は……、手の振り具合、その他、こまごまとした指令を意識的に発することなどまずない。

ほとんどは、無意識のうちの反射運動である。

「のろのろ歩いているのね」と言われた時は、「早く歩くと疲れるから」という。わたしは別に疲れるからのろのろ歩いていたのでも、疲れるからせかせかせか歩いていただけでもなく、無意識にそうになっていただけのことなのに無理に理由をつけている。

本当は人間のすることの殆どは、動物とおなじ反射的なものによつて支配されているのに、自分は動物じゃなく人間なのだからと、理屈をたくさんつけて、説明しなければ気がすまなくなっている。理由づけをしないときは無責任だと責められてしまう。

まわりの人たちは責任を取ってもらつたほうが、何事もうまくいき便利だから、いやでも理由づけさせようとする。青年は何でも「カッコイイから」の一言で片付けようとする。大人はこの社会の体制にすっかり組み込まれてしまい、みんな都合よく生きていくためには責任の所在をはつきりさせなければならぬと信じて疑わないから、青年達を責める。たいてい理由などというものは、自分に有

利になるようにつけるから、ずるさが責任の分量をきめることになってしまふのだ。

内側を外側にする

まつ毛のかげの目の窓から前方を見ながら、この身体を運転している想いもあるが、身体の動きなどというものは、自分にも、他人にも、はっきり認識されない不可解なものなのだ。どうしようもない、じつと身体を押さえこんでみても、全身で動き続ける、死ぬまでとどまることがない。

大動脈、大静脈、心臓、末端の毛細血管、そんなものの中を血液がかなり早いスピードで循環している。この血液に乗れば、全身旅行ができるだろう。

以前、人体の中を冒険旅行をする映画があったが、そんなこともあり得るかもしれない。或る人の身体の間が、珍しい景観に富んでいるということ、旅行ブームなどということにならないともかぎらない。

この身体、何がどうなつて、絡み合つてできているのかわけのわからないもの、しかしよくよく見れば、電子や、陽子などが、飛び離れて浮かんでいるだけで、殆ど全部が空間に過ぎないのだろう。

こんなコントがあった。カエルを裏返しにした。カエルは何処にも見えない。カエルはカエルの外

側である宇宙を全部入れて裏返しになったから。裏返しになったカエルは遠い遠い宇宙の果てになっ
てしまった。

人体もいつそのこと、そんな具合に裏返しになって、内部を全部外側に放り出したら、さぞ気持ち
のよいことだろう。

完

1964 婦人公論掲載